

福生第三小学校とPTA

出席者

貫井伊作 船木甚平 並木秀 飾外次郎 森田芳松 青柳福治
立川愛雄 細谷勇太郎（第三小学校長）
司会と記録 山崎茂男（昭和四十五年八月収録）

はじめに

創立九十有余年を誇る福生第一小学校、同第二小学校にたいして、福生の他の小・中学校は、戦後の誕生である。

近時は別としても、日本の敗戦直後この町に創立された第一中学校と、第三小学校については、その建設とその後の歩みにおいて、いしれぬ苦心の道程があった。

そのうちの、第三小学校について、かつての同校PTA会長として活躍された皆さん。また、その役員当時の記録を特に保存されている立川さんに出席していただき、PTA当時の思い出を語ってもらった。

第三小学校の沿革（その一）

開校時より五周年まで

（同校『創立十周年記念事業協賛会誌』より）

年 月 日 記 事

二六・九・一五 開校告示

九・一八 初代校長広瀬義雄先生発令

一〇・一 一小にて開校

一〇・二〇 PTA創立

初代会長・村野喜平氏

一一・二 現在地へ移転開始

二七・四・二二 給食調理室落成

五・二二 給食開始

二八・五 PTA二代会長・貫井伊作氏

八・五 第一回臨海学校開校

一二・二三 運動遊戯施設設置

二九・一・一〇 全教室ストーブ暖房開始

年月日	記事
三二・五	PTA六代会長・飾外次郎氏 放送室完成
五・三二	エルモ一六ミリ映写機購入
七・二九	映写用暗幕装置完成
八・一〇	統計教育指定校となる
三三・四・一	PTA七代会長・松永栄氏 新校舎第一期増築工事六教室落成
五・一一	新校舎に移転完了授業開始
六・二	新校舎周囲花壇芝生の整美
六・二二	第一回林間学校開校（五年生・一泊二日）
七・二五	理科振興法による理科器具整備完了
一二・一九	新校舎増築のため旧校舎四教室取りこわし完了
三四・三・二三	PTA八代会長・井上岩次郎氏 新校舎第二期増築工事六教室落成
五・六・三〇	新校舎に移転授業開始
七・九	

二十六年に三小が独立する直前の第一小学校の児童総数は一、三二二名。そのうち四一一名が第三小学校へ分離になった。

五周年当時の三小の児童総数は六九七名、また町人口は、約一八、五〇〇名であった。

第三小学校の沿革（その二）

五周年後より十周年まで

五・三〇・四・七	PTA三代会長・船木甚平氏 水道引込み水道栓取付
五・九・一五	PTA四代会長・小林広男氏 完全給食開始
三一・四・三〇	初代校長広瀬義雄先生転任
五・一	二代校長・館盛光先生発令 PTA五代会長・並木秀氏
一二・一二	一円月掛貯金開始
三一・一・六	同窓会創立
三・一六	創立五周年記念式 校歌制定披露

八・二二 新放送設備完成

一〇・一二 図書館施設完成開館

一一・一五 統計教育指導計画完成

三五・二・二六 統計教育研究中間発表会

三・三〇 新給食調理室完成

五・一五 新校舎第三期増築工事六教室落成

九・二五 新校舎防音工事完成

一二・六、七 統計教育全国大会に発表

三六・五 PTA九代会長・吉田清氏

七・一一 プール竣工・プール開き

八・三一 新校舎第四期増築工事管理校舎落成

九・六 創立十周年記念事業協賛会発足

一一 創立十周年記念式、庭園整備、鼓笛隊誕生、記念誌発行

十周年記念式当時の三小の児童総数は七一六名、また町人口は約二二、〇〇〇名であった。

なお、三十七年以降のPTA会長は、森田芳松（三十七） 野本長衛（三十八） 山崎茂男（三十九）

（四十一） 青柳福治（四十二）（四十四） 高橋芳雄（四十五）の各氏である。

校舎建設

司会 いまの第三小学校は、はじめ福生中学校だったんですね。そのはじめの校舎は軍の兵舎をもらってきて建てたものだとも聞いていますが。

貫井 終戦後新しい六・三制の教育制度が発足した時に、この町でも新制中学校をつくらねばならなくなった。そこでその中学校の敷地問題が議会に出たわけです。

はじめ、その場所は福生町の中心地ということで、最初候補地になったのが、今の木崎材木屋さんの一角でした。

が、戦後のことで、食糧問題がやかましく論じられ、また農政の問題もあって、あの土地がらでその交渉が、意のごとくいかなかったわけです。

たまたま、戦争中に日本陸軍が、上の飛行場の軍用機のかくれ場所にと、今の学校の辺が大きなハケ地帯だったわけで、あそこに横穴を掘って、そこに飛行機をかくしておいたんだが、そこらがとてもいい砂利地であった。

戦後、アメリカ軍がここに来る時にこれに着目したんです。多摩川からどんどん砂利や玉石をはこんだが、それだけでは不足するというで、あの場所も掘り出して、今の学校からグラ

ドにかけての一带の土が、基地の滑走路に敷かれたわけです。地主は、トラック一台にいくらということで、あの砂利土を米軍に提供したのです。

その結果、あの辺一带が相当の広場になった。それで、その場所が中学校の候補地になったんです。

でもあの辺は、水のわき出るところで、また皆がかつてに掘り出したあとだから、でこぼこでもあったし、これを整地したところでもとも樹木も植えられないし、学校の敷地には不適だという意見が多かったわけです。

私は当時、町議会の議員だったんだが、議会としても同じような意見でありました。しかし、その以前にもうその場所を町として認めてあったという申し送りもあって、ここに中学校をということが決定づけられた、というように私は記憶しております。

司会 中学校は、はじめ今の一小のところに間借りしてたんですね。発足と同時に橋本兵五郎先生が校長に着任されました。それ以前に、職員室だけ、青年クラブの二階でやってたことがありました。

一小の建物から、今の三小のところへ中学校が越してきた時、私も少し中学校に関係があつて、生徒たちと机や腰掛をかついで越してきたのです。あれが昭和二十三年の七月だと思っています。

貫井 そのころ、私どもの生活は、新円切替の時で、財政的に町も私たちも大変な時だったん

ですよ。

校舎もふつうではとても建たない。それで当時どこの町でも、旧日本軍の兵舎をねらったわけです。福生でも村山の飛行兵学校の、食堂だった建物を払い下げてもらったんです（記録では二十年三月・三十二万六千円とある）。

ところが、その建物が中廊下つきでその両側を教室に使うことになった。片側はどうしても日陰になってしまふんです。校舎としてはどうかとも思われたが、当時はそんなぜいたくは言っていられない。建ちさえすればいい、ということだったですから。日があたらなくなつたって中学生だからがまんできる、大丈夫だ、ということだったですね。

ところが、それができたのは二十三年の五月だったんですが、この地区が区画整理で市街地化され、この土地の農地だったところが宅地にかわり、この辺が急に住宅地化したわけです。そういうことから、町でもいままでの福生、熊川の一・二小だけでは不足で、この辺に第三小学校をつくらなければならなかった。

この時、熊川の高橋角蔵さんが議員でいられて、その高橋さんと田村酒造さんの雑木林地帯を協力していただいて、そこに第三小学校をつくることになった。

ところが、中学校の関係者から声が出て、そっちの方を中学校にして、今の中学の所を第三小学校にと、くらがえになつちやうです。

あの中学校の建物は住民の寄付でやったわけです。私たちも寄付金あつめのために歩いたが、家によっては寄付に反対で、町の中学には子どもをやらないから、と応じなかった人もいましたよ。

とにかくあのころは、学校を町の力だけで建てるどころではなかった、経済的にどの町だって動きがつかなかったのですから。

はじめのあの校舎は二十三年の十一月にできあがったんです。

それが二十六年の十一月に中学校といれかわりに第三小学校が使うことになった。そうしたら、あんな陽のあたらない教室のあるような、なんであんな校舎をつくったんだと非難の声がたくさん出ましたよ。さっきも言ったように、あれをもらってくる時は、中廊下があるからどうのこうのなんて言えたものでなかった。その時の苦勞を知らない人から見れば、なんであんな校舎なんて言われるんですね。

私たちも、中学校と第三小学校のいれかわりのいきさつは知らなかったが、それから第三小学校が苦勞したんですよ。

学区変更

司会 一小から三小へと変わる、その通学区区域変更はむずかしくなかったんですか。

貫井 それが大変だった。中福生が大反対でしたよ。第一小学校の方が、設備やら教材も、いっさい揃っているんだから、第三なんかへいかないって言うんです。それに、第三へ通うとなれば線路を越していかなけりゃあならない、それも反対の強い理由になってました。場所だって、当時は町のはじっこで不便な所だったですから。だが、中福生がいかなければ第三がはじまらないうし、これが大ごとでした。幸い、この中福生からPTAの初代会長の村野喜平氏が出たので、この学区変更もどうやらおさまったわけです。

司会 志茂あたりはどうだったですか。

船木 この辺は問題なかった。原力谷戸の辺もむずかしくなかった。中福生は昔からの大部落だけど、志茂や原力谷戸の方は、家もほとんど無かったですから。

PTAの発足

司会 二十六年の九月から、第三小がスタートしたわけです。初代校長は、ひげの先生で有名だった広瀬義雄先生、教頭は増毛雄三先生だったですね。

PTAもすぐに始まったんですか。

立川 その準備は二十五年から始まりました。参考のために、志茂地区の当時の記録を見たいんですが。

二十五年の九月十七日に一小PTAだった志茂部落委員会が開かれました。その日の三つ目の議題に、第三小学校開校設置によるPTA組織準備委員会委員を選出しました。その委員には、加藤守美 船木甚平 松永栄の皆さんが選ばれました。

九月二十日には、第三小地区の第一回準備委員会が開かれて、委員長を選出しました。委員長が設楽誠治さん、副が小林広男さんでした。

九月二十七日に第二回準備委員会を開いて、各地区ごとに役員候補者をもちよりました。

志茂が船木甚平さんに加藤守美さん、牛浜は貫井伊作さん、原力谷戸が井上岩次郎さんでした。

二十九日夜に第三回の会合をして、先ほどのお話のように、中福生の事情を考慮したりで、村野喜平さんを初代会長という線が出て交渉を進め、内諾を得ました。

船木 わたしの娘が、二十五年の四月に第一小学校に入学したんです。そのころ第一小は児童があふれて二部授業だったですよ。

夏の暑い時でも午前の部と午後の部がある。午後の者はね、昼前遊んでしまうから、午後出かける時は眠くてだるくて大変でした。

はじめてこの様子を学校へ行って見た時は、びっくりしたね。

二十六年の十一月二日ですか、第一小の庭へみんな並びましてね、一小の児童が見送るなかを、広瀬校長先生が先頭で、しんがりにPTAがくっついて子どもたちは腰かけをかついで、一

小とおわかれしてきたんだが、あの時のもようは今でも忘れられませんね。

創設時代

司会 それから今日の三小になるまでの、学校あげての苦闘時代が始まったわけですが、そこらについて、各会長さんの思い出を話してもらいましょう。貫井さんからお願いします。

貫井 わたしは名前だけの会長で、実際は副会長の飾さんたちにお願ひしたままだった。ただあの校地一帯の敷地確保では思い出があります。

あの敷地の買収交渉は、坪五円から始まったんです。それを地主におこられたりしながら折衝を続けていって、十五円ぐらいまでいってからうごきがつかなくなっちゃった。地主さんたちに集まってもらって、とうとう今の福祉会館のところから第三小の一带までを、二十五円で買うことにしてまとめたわけです。

あと一つの思い出は、当時、教室での勉強も必要だが、これからの子どもは体位の向上をはからなければと、スポーツ用具を校庭に設置するということを重点にしました。それを学区の皆さんの寄付を仰いでやったわけです。各部落を役員さんとまわって、皆さんに十分理解してもらって、庭の運動具は一通りそろえることができました。

船木 初代の村野さんは、十一月からの半年とその翌年を一年やりました。次が貫井さんで

す。それらの大物のあとへ私のようなものにやれてお話でした。三代目は責任重大だ。とても気安くは受けられなかったですが、当時三小は発足早々だから、PTA会長をえらぶのに、胸に議員バッヂでもつけてる人間でないとどうにもPTAの発言も町へ届かない。というような事情もありましてね、私も議会へ出てたんだから、引受けざるを得ないハメになっちゃったわけです。

いざ会長となってみると、庭の運動具まで一般の寄付に頼っている状態でした。こりゃあ、私もそのつもりでかからないといけないと思いました。そのころ、各地でポツポツ給食ということが始まりまして、三小でも簡易給食を二十七年からやっていました。それを完全給食にならないかと思ひまして吉野小学校の山崎校長先生の所へ勉強に行ってきたりしました。そして町の教委へも強く報告しておいたんです。(学校給食の今昔参照)

それから、はじめに貫井さんがおっしゃった日陰の教室の寒さの問題があったわけです。あの教室の子どもたちはふるえて勉強している。

役場へ出かけてそのことをかけ合っただが、町側では、我々が子どもころは小さな火鉢が一つあったくらいじゃないか、冬でもハダシで過ごした、なんて冗談を言ってる。だから暖房もできるだけしんぼうさせろ、と言うわけだ。こちらは冗談いうなど食いつたが、当時の町の財政状態はひどかったものです、ぶたれても鼻血も出ないということだった。

それでまたPTAが苦心してダルマストーブを入れたんです。できるだけ安く買うために、川口市へ役員で出かけました。そして十個だけストーブが入りました。

飾 あの時ダルマストーブを町で買ってくれと交渉したが結局だめでしたね。町でやってくれたのは煙突だけでしたよ。燃料にはコークスを使ったが、私はあのころ自分の仕事場でコークスを使っていたんです。それで、これがいいと思ひ志茂の木村徳蔵さんにかけあった。そしたら大きいと小さいのがある。これを燃やしてみたがなかなかえない。煙突がないとだめなんだね。そんな苦労もありましたよ。

私は、今の三小の近くへ最も早い時期に住みついた者として、毎日あの場所を見ていた。

砂利を掘ったのは無茶苦茶のような掘り方だったからでこぼこだらけで、雨でも降るとすごい水たまりができる。そんな所へ校舎ができたんですからねえ。自然に教育に関心をもたざるを得なかったですよ。そしてこの三小の父母の教育熱心さが、いまのこの町の教育優先のあり方に、大いに影響したのだと自負しておりますよ。

貫井 まったくあのころの学校のことを思うと、今日実に立派になった第三小の姿は、うそのようです。

奉仕の姿

立川 さつき、船木さんから給食の話がでしたが、私にもこんな思い出がありますよ。ミルクといっていた脱脂粉乳ですが、あれをPTAがすりばちでつぶしたんです。

船木 あれがうまくないということで評判が悪くてね。

立川 あれはどうしてもタマのようになるのがありましてね、それをおかあさんがたて出てもらってつぶしたんだが、これはどうしてもミキサーがほしいとなったんです。まず町へ働きかけようと議員さんを手分けでたずねたりしました。

そして、各校共同でという人もいた。とんでもない、それでは実際に使えない、各校別でなければと、三十年十月にミキサーを入れてもらいました。かわむきの機械も一しょに入りました。

飾 それまではPTAが当番で野菜の皮むきやらいろんな給食の手伝いに出ましたね。

牛浜の黒田パン屋さんへ、粉をもっていつてパンにしてもらって給食にまわしたりしました。完全給食になって楽になりましたね。

飾 貫井さんの代に運動用具の設置をしたのは、先程お話がありましたが、あの時、寒い雪の中を防寒姿で、寄付説明に歩きましたよ。はじめ五万円ぐらいという目標だったが、あの時二十万円も集まりました。

そしてあとの二十万円を町が出してくれて、今でも庭にあるあの遊具が買えたんです。

司会 そういう、寄付金というようになことに対しての批判的な動きはなかったですか。

飾 それはもう、PTAの会合を何回もやってよく説明しましたから、全然反対の声など出ませんでした。

立川 私たちも、PTAの講習会などへいきますとPTAはこうあるべきだ、なんてよく聞かされました。そりゃあ、わかってはいるんですが、でも現実には何かやらねばならん、ということで、庭の石片付けをしたり、七夕祭りがすむと、そのあとの竹をもらってきて、教室の日除けのヨシズを張ったりした。夏は、多摩川で水泳の時危険物はないかと川の中へ入ってしらべたり、休憩所のヨシズ小屋をつくったりね。

総会をやるのにも客用の腰かけなんてない。先生が車の後について、PTAの役員が運転して武陽金庫へ、その腰かけを借りにいったりね。

花壇づくりのために、リヤカーを引いて土もらいもやりました。砂利を掘ったくらい所だからそのままでは花など咲きません。とにかくきびしいものでした。涙なくして語れませんよ。

ストーブのたきつけ用の燃料がなくて、福生建設の小川惣太郎さんへ古材木をもらいにいきました。買うんないいけど貰うんだからね。こんなことは当然町がやることだったんだろうけど、その日が困るんだからしかたなかった。

並木 あの時是小川さんにお世話になりましたよ。みんな感謝してましたね。

資金かせぎ

船木 PTAの予算不足というわけではないが、その運営資金のために、運動会の際に厚生部が、PTA売店をやりましたよ。

当日は、PTAの店があるから外部では買ってくれるな、売店を使ってください、とPRをしておきましてね。あれはかなりの利益をあげましたよ。

運動会が終わると、こんどは展覧会の際にバザーをやりました。これは会員から応分の品物の寄付を受けてね、これを金にするんだから、これはでかかったですよ。

私もね、義務教育の小学校だから、学校用具は当然こういうものに頼るのはおかしい、ということは十分承知していたんだが、そうはいっても実際に不足だらけのものはなんとかしなくちゃあということですよ。それでPTAが動くことになっちゃう。そしてこうやってあげた純益で、校具など買ってきたんですよ。

司会 あれはいつごろまでやってたんですかね。いまは全然やってないわけですよ。

青柳 ぼくがはじめてPTAに顔出ししたのが三十七年です。その時、厚生部長をおおせつかりました。

実行委員会の席で、運動会に売店をやるということを聞いて、PTAとはこんなこともやるのかと驚きました。この時、今聞かせていただいたような先輩の皆様のご苦勞もわかっていたつもりでした。だからこうして長年やってきたからには、この売店も、ただ単なる資金かせぎというほかに、何かの意義があるんだろうとも思ってみました。

いずれにしても、やりもしないで批判だけでは私の骨おしみになってしまふ。ともかくやってみてその内容を検討しよう。そして、次期の人に申し送る場合にも、実際これだから、ということと言えるようにしてからだ、と思いました。そして、売店をやってみて、やはり反対の意見でした。

なぜ反対したかと、言いますとね。これがPTAの大きな資金源である、という反面ですね、その売店のために、委員さんには相当の犠牲がはらわれるわけです。

売店の準備は運動会の一週間も前から始まるわけです。おでんの材料などを、当日の天候を気にしながら、しこむわけです。せっかく仕入れても、当日雨で使えなくなったら大損です。それはだれがしょういこむのか。それは厚生部が責任だ、なんて言われたら大迷惑ですよ。部長ともなるとその苦勞だけでも大変でした。

当日は、売店係りの委員さんたちは、その場にいながら、わが子の様子を見たくても見られませんでした。

一方、子どもたちは、おでんのいい匂いだけがされてふらふらする。でも、子どもは買ってはいけません、ときついお達しですね。売店それ自体が、小学校の運動会というものからはかなり矛盾しますよ。

それなら、こんなことははずしてほかの方法で資金をつくることを考えるべきではないか、と思いましたがね。私のその体験をそのまま、運動会後の実行委員会にもちだしましてね、次年度からやめてもらうようにしました。

船木 いやあ、私たちの時もね、それはいつも感じてました。

バザーでね、しるこを売る。それが全部売りきれないで余ることもあるわけですよ。そうすると厚生部が困ってしまう。会長さん、どうしましょう、と言われる。しかたがない、と会長や役員で、その余った分だけ買いとりましたよ。

司会 ずいぶん無理があったようですね。それでね、それらの純益は、当時のPTA会計のどのくらいになっていたんですか。

船木 いや、かなりになってましたよ。

たしかに、これはこのようないけない面があった。こんなことから、町の方なんかも、ほうっておけばPTAの連中がなんとかするわい、とほっかむりしていたんですよ。親たちにすれば、それをやらなければ第三の子どもたちが思うような勉強ができない、だからやむを得なかったの

ですね。

司会 校具等のために、いわゆる寄付金を広く仰いだというのは、どのくらいあるんですか。
飾 運動遊具ですね、それとタルマストープ、視聴覚教室の備品。

ずうっと後になるが、十周年の時と、鉄筋校舎整備の両協賛会の寄付金が多い。

司会 給食の設備などはなかったですか。

船木 それはやりませんでした。

司会 学校によってはやったところがあるように聞きましたね。

船木 とにかく当時のPTAはのんきではいらなかった。今の人たちには批判されるでしょうがね。

貫井 今とちがって、財政的な面で町が苦しい時だったから、つい父兄の方に無理を言ってしまったんだね。

あの当時は荒地だったんですよ。荒地を畑にし、そこから作物を得るまでの農民の苦勞と同じことをやってきたんです。

今は、教育ママとかいう言葉があるようだが、教育に熱心のあまり、それへのよびかけは、やりよいかわりに、いろんな意見が出るわけでしょう。私たちの時には、ただ、学校に協力という考え方だけでした。福生の方にはそんなことはないだろうけど、よそのPTAなどでは、なかなか

か学校にむずかしいことも言っていくらしい。それだけに、今の役員にはその面でのむずかしさがあるでしょう。

飾 PTAは、学校教育に協力しつつ、おたがいが成人教育の場とするということだったろうが、我々のころは、そこに入る前にまず経済援助がいつも先になりましたね。

細谷 私は、皆さんのお骨折りの時代のあとにこの学校にまいりましたので、今日はお話を聞かせてもらうだけなのですが、でも場所はちがっても私もその道を通ってきました。それで、ひとごとならず昔のことを思い出していました。私どもも、あのころPTAの皆さんのご苦勞を見ていて、これでいい、とは決して思っていないませんでした。が、どうにもこれよりほか、やりようがなくて、と言えたと思います。

ないものは仕方がないんだ、とあげて児童も、先生も、PTAもこれに力を結集して教育の場にあたっただけなという点では、いい時代ではなかったでしょうか。

敗戦の打撃の中からたくましくたちあがっていった。あのお互いの努力した姿は貴いものでした。

税金滞納にもPTAが

飾 あの兵舎の校舎。ガラスがこわれて風は吹きこむ、戸はすきまだらけ。向いの教室からこ

っちの教室とつつ抜けに聞こえる。ときたま学校に出かけてあの様子を見た我々は、なんともいいたまれなかったですよ。

船木 我々の時代にも、役場へいけばそのことを強く主張したですよ。あの校舎をなんとかしろ、とね。

立川 このような話に大いに関連があるんですが、町が苦しいのは町民の納税に滞納があるからだ。この滞納をなんとかしてもらおうと、PTAの連合会がとりあげました。この滞納のために教育行政もおくれている、と新聞折込みのチラシを入れたんですよ（二十九年当時のそのチラシを持参されて）。

並木 私は五代目で、三十年度の会長でした。次代の井上岩次郎さんまでは全部現職議員でした。つまり会長は顔で、役場とかそのような外部折衝にあたればいいんだというようなことでしたが、そのかわり役員陣は強力で、実に熱心な方が揃っていました。私の時に、初代広瀬校長先生から、二代目館校長先生に代って、創立五周年をやり、ささやかながら花壇が出来たり、校歌を制定したりがありました。新しい校長先生になって、第三小学校の創設時代も一まず終わって、という感じでしたな。

いきすぎの面も

並木 そのころは、PTA活動とにかく熱心な人が多かったですね。部落の活動にしてもそうでした。わずか任期一年間のつき合いだったが、今でも当時のPTA関係だった人たちは忘れられないですよ。

飾 いや一面ではね、あの当時はPTAが学校に関心をもち過ぎた傾向もありましたね。

並木 いやありましたよ、こっちもそれにおおられちゃってね。

飾 なにしろ、学校の教師を動かしたりしましたからね。

司会 へええ、人事にも口出ししたんですか。

貫井 そのあと始末を、私なんかやらされましたよ。とにかくPTAが強過ぎた面もあったね。

並木 いや、あくまで熱心さのあまりで、今考えても貴いものでしたよ。正直かなりけむったいものもありましたな。

私はPTAをやめてからも、町議員であるということで、多少、学校のことにも関係してたわけです。私が皆さんから一番強く言われたのは、あの真中廊下つきの校舎をなんとかしろ、ということでしたね。

貫井 あれをつくったころはね、まさかそんな声を聞かされようとは思いませんでしたよ。必死の苦しみでみんなやったことですからね。そういうふうに、時代が進展したんですよ。

木造防音校舎と十周年

飾 福生が、学校教育にこれだけ熱心になれたことは、一つには三小がこうさせたのだ、と言っても過言ではないと思います。

第一、第二には昔なりの校舎があつてね、立派なものでしたよ。それが三小は堀立小屋みたいなものでしたよ。それに対して我々は、だまっていられなかったですよ。

司会 それは本当でしょうね。誰かが、あの時代あおした熱意をしめさなければならなかったのですね。

森田さんは、木造の防音校舎の建設とか、それにつれての十周年の辺の事情にくわいいですね。

森田 私は三十五、六年と副会長でした。その時に三小の十周年にあたりました。校舎のことは、先程の先輩たちの声でだんだん成果をあげまして、私たちのところに、陳情書と

いうんですか、あれをつくりました。学区の議員さんにも寄ってもらって運動をしました。町議会の傍聴にも出かけました。その時、第三の地区の議員さんが、学校建設のための発言をしていました。そういうことがいろいろありましたが、三十三年に、新校舎の工事が始まりまし

た。

それで、PTAとしては、ちょうど三小の十周年がくるので、この機会に何とか校内外の設備をよくしてもらおうと、その二年前から十周年記念行事の計画をたてました。

あのころは、こういうことをやるには寄付金をもとめるより、ほかにやりようがなかったのです。

町にもあたったのですが建物建てるだけで、あとはとても無理のようでした。

十周年では、庭園の設備、学校園、鼓笛隊、校章も飾さんのお骨折りでできましたね。

この十周年行事については、石川信義氏に会長を引受けてもらって、大変お骨折りをいただきました。

司会 ああ校舎は、町だけでつくったんですか。

並木 建物は町でやったんですが、そのあとすぐに防音の二重窓にしましたね。これは国がやったんですね。

森田 あの時、最初の図面では、町側がコの字型の校舎を考えてたんです。これではうまくないと、学校とPTAが反対して二列にならべた形になったんです。コの字型については、三小は庭が狭いので、それを頭においた町側が、庭を広く使えるようにということで、コの字にしたらいいですね。

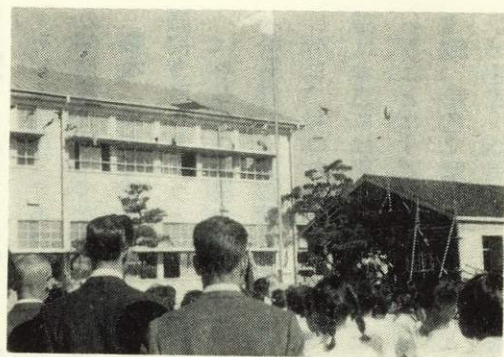
あの二重窓にしたのは、いったん校舎ができてからやりなおしましたね。そのために一教室三十万円とか余計にかかった、と聞きました。

司会 十周年の時の資料によりますと、協賛会の募金額は九十二万円ですね。そして主な購入品は中庭に四十万円、鼓笛隊が二十万、校旗が五万、そして式典に二十二万円（児童の記念品、教員表彰費、その他）ということでした。

そして全部できあがったのが三十六年ですね。それから四年目には、それをぶっこわして、今の鉄筋校舎にたてなおしたのですね。

船木 瀬古町長さんが十周年の式典の時ね、近いうちにこの木造校舎を、一小、二小なみに鉄筋校舎にしちまうという。我々は、町長がかいラッパを吹いてるなぐらいに思っていましたよ。いやもうこの校舎で十分じゃないか、と言ったらね、防衛庁から九十パーセント出るんだから（基地周辺の公共施設の防音化方針）この機会でなければ鉄筋校舎にできないんだ、と言うんだな。しかし、ものの考え方からいって、もったいないじゃないか、と言ったんですよ。それに、その話は本当には思いませんでしたよ。それが、その数年後に実現した。なるほど国を相手にするということはずいものだ、と思いましたね。

飾 騒音で勉強ができないということだから、木造ながら防音校舎になっている。それで当面こと足足りてはいるんだが、基地周辺の自治体の校舎は、はやかれおそかれ鉄筋の防音校舎にな



第3小学校十周年祝賀会

れる。それで、町の方針としても一小、二小のつぎは三小だ、ということだったんですね。

森田 十周年記念をやる時に、児童たちの一円貯金というのが役にたったんですね。並木会長さんの時代に館校長先生の発案で、いざという時に何か不足のものを買えるように、ということとで児童に貯金をさせたわけですね。それが十周年の一番基本のものになりましたね。少額のもので、心のこもったものは貴いものだ、とつくづくあの時に感じました。

並木 あれは、館先生にいい種をまいてもらったんです。

基地の町の学校

司会 ところで、基地の町の学校ということで、直接第三小が受けていた被害というものがありませんか。

細谷 やはり、風紀の問題でしたね。環境づくりといえますか。そのことで、立川さんがここに、当時の新聞記事をもっておられます。

立川 これはね、こういう記事なんです。

「住民が、町の浄化運動をおこす。

夜の女の一掃に、

福生町牛浜で請願書提出」

という見出しなんです。記事は、

「学校が二つ、総戸数百軒という静かな部落に、夜の女の置屋が四十軒と半数近くできたのは青少年の教育に悪影響を及ぼすと、部落の有志がたちあがり浄化運動にのりだしている」

というようなものです。

これは、飾さん、小林広男さんなどが発起人になって、町へ請願書を出したわけです。二十八年のことです。

船木 当時の議会もね、トラックに「教育環境を守るため、夜の女の一掃」というまん幕を張ってね、マイクをもって町中を走って町民に訴えたですよ。

飾 請願書を出したのはその前ですよ。

このきつかけですが、町自体も教育環境ということには関心をもちませんでしたよ。そういうふうな町が乱された。夜の女に一般住宅を賃貸して、それで食っていかなければならなかった時代ではあったんだが。私が教育にことさら関心をもったのも、このことからでしたね。

そのころの週刊紙に、ある有名な夜の女が福生町の写真入りで、パンパンの町、夜の女の町としてしゃべっているんですよ。それを見た時に私はまったく情無かったですよ。

一番頭にきたのは、昼日中、リヤカーにダブルベツトを乗せて、それを引いているのが二十代の青年で、うしろに洋モクをくわえたパンパンが乗っている。そんな姿もたびたびなんです。葬式の家のすぐ隣で、女たちが米兵相手にさわいでいる。そういう姿にも、町の教育関係者がまったく沈黙のままでしたよ。

先生方にもそんなことを言ったんだが、当時の町の事情として、それで生活しているPTA会員も多いんだからどうしようもない。そこで、私が先頭に出て断固やっただけです。ところが、ある時は私はそれらの人にかこまれて、なぜそんなことをするのか、とやられましたよ。どうしてわれわれの商売を妨害するのかというのですね。私は逆に、君たちは、教育というものをどう考えているのか、青少年への影響などわからないのか、と質問してやりました。

とにかく商売女はたずねてくる。飾を殺してやる、という男もいたということでした。それから間もなく、いまの赤線ができたんです。

船木 議会へもきましたよ。浄化運動とは何ごとだなんてね。まあ、当時の暗い思い出ですが、PTAの会員の層も、今はちがいますね、ガリ版刷りぐらいは自分たちでやっちゃう。文章も書きますしね。

司会 話はまだまだ伺いたいんですが、この辺でうちきらせていただきます。

どうもありがとうございました。

貫井 おしまいになりましたが、本日のこのようなお話の席に、第三小学校としては一番の恩人であられる、初代校長の広瀬義雄先生。そして初代PTA会長であられた村野喜平氏が、ともに近年他界されてご出席をいただけなかったのが、大変残念でございます。

皆様とともに、心からごめい福を祈りたいと思います。

△編者より▽

この座談会后、八代会長吉田清氏も病気のため他界されました。ごめい福をお祈りします。

(編者註)

文中にあるように、三十六年に第三小学校の木造防音の校舎が完成したものを、国の防音化方針等によって、国家予算による防音鉄筋の新校舎に改築工事がされた。すっかり今の校舎に変わったのは四十二年の夏であった。

その際、鉄筋校舎整備協賛会が学区内に組織され、その役員さんをはじめ、村野喜平氏は会長として、大変なご尽力をされた。

この時の決算面から見た概略は、寄付金等の総収入 三百五十万円。

主な整備品は、各教室のテレビとスチール黒板、図工科教具で百四十万円。理科学習図、散水装置等で百九十万円。祝賀会費で五万円。その他で十四万円。という内訳であった。最近、耳にした話である。

米軍横田基地の教育関係者が、この第三小を視察した時のこと。通訳を兼ねて、青柳福治氏がその席にいた。

米人の言うには、

「この学校はモデルスクールであるのか。大変校舎も立派であるが、それよりも中の施設が整っているのに驚いている。各教室にテレビがある。庭には散水施設があつて、一せいに散水がされる。先生方の教育指導も、細かくゆきわたっている。素晴らしい学校である」と真実、驚異の面もちだったという。

この話にある各教室のテレビ、庭の散水施設等は、前記の整備協賛会が寄付したものである。先生方も、これら恵まれた施設を十分に活用して、現在の第三小学校は、充実した新教育の道を歩んでいる。

この座談会当日、第三小学校二代校長の館盛光先生は、ご病気のため欠席された。そのため後日、紙上参加の形で次の一文をお願いした。

第三小学校の十年

館 盛 光

昭和三十一年五月一日、福生第三小学校長の辞令を受けて赴任してから、昭和四十年四月一日、青梅第三小学校長に転ずるまでの十年間がわが生涯における輝ける、といえたいえる、まことに思い出多い日々といえるだろう。

福生には新卒で第一小に五年、ついで第二小で教頭生活七年を過ごしているので、三小に校長となったことは、まるで故郷に戻ったような気分であった。それからの日々を楽しく過ごすことが出来たのも一つにはそうした過去の、無数のつながりが、私を導き励まして大きな支えとなってくれたからだ、と心から感謝している。

さて三小の思い出の最も大きなもの、といえば、そこで廻り会った多くの人々との、心のつながりの数々である。しかしこれらはあまりにも多きに過ぎるので、ここでは割愛し、その他のことを記して見たい。

まず挙げられるのが五周年記念行事、その次が校舎の建築、統計教育指定校、プールの建設、十周年記念事業等々である。これらは三小の歴史を語る上に欠けてはならないことといえる。

しかしそれらについては、他の方々もいろいろと語っておられるので私は少しだけ記して見ることにする。

創立五周年事業については、当時何ら計画のなかったものを、並木秀PTA会長に相談したところ、会長も大乗気で、ぜひやろうということになった。

相談の結果、形より心のことを大事にしようということになって月掛一円貯金、同窓会の創立、校歌の制定そして記念式典と、思いもかけぬ事業ができてしまった。

五年でやれば十年十五年と五年毎にどんな形かの記念式が行なえて、どの児童も在学中に一度は学校を記念する式に参加できる、というのがねらいだった。それにしてもこのことを二つ返事で承知して、先頭に立って努力してくれた並木会長は何とも偉いものと今も感謝している。

校舎の建築は私の三小生活で最も多く精力を注いだものといっても過言でないと信じている。教育は人であって器ではない。それは何も今さら松下村塾のことを挙げるまでもないことである。

ただし現代の社会においては、整った器にすぐれた教師を入れて、最高の力を発揮させてこそ現代にあった教育ができることを忘れてはならない。

私は三小への辞令を受けて赴任の日、正門に立って古びた校舎を眺め、土砂を取られたあと、むきだしになっている赤土のどてを眺めたとき、一日も早く校舎を建て替え、環境を整備しよう。

う、そしてここに子どもたちの楽園を築こうと決意した。

この考えが、さいわいに実って校舎の建築が始まり、そしてそれが完成するまでに五年半の歳月がかかった。

赴任直後に並木会長と校舎建築のことを話し合ったときには、新築のことなど、いまだ話題にのぼったことがなかった時だけに、一片危惧の念がないわけではなかったが、とにかく一つやろうではないかと、覚悟をきめた次第であった。

そこでPTAの会合で校舎新築の運動を展開することになり、まず学区内議員を中心とした地固めから始まって、理事者・議会方面への働きかけを行なって根廻しを十分にすることに努めた。PTA会員の運動として、会員全員の署名捺印による陳情請願も実施した。

これらのことが功を奏したか、三十二年の秋には早くも新校舎の建築が始まり、翌三十三年五月には第一期工事が竣工することになった。

爾来五年間に、第二期第三期工事を完成し、更に第四期管理棟を建てて、昭和三十六年八月には、全工事の竣工となり、ここに三小は創立以来十年で、まったく面目を一新したのである。

校舎の完成を待つように開校十年目が訪れたので、秋十一月には、創立十周年記念式典を挙行し、事業として、学校庭園整備、鼓笛隊創設、記念誌の発行等を行なうことができた。

これで創立五周年のときの約束が果たせたのであるが、浄財九十万円余はほとんど学区の方

ちの芳志によるもので、よく短時日にこれだけのことが出来たと感心したのであった。

校舎の建築と相まって、内部整備にも力を入れた。それらは沿革誌を見るとよく本校の移り変わりがわかるのでその一々には触れない。

林間学校は三十三年の七月に開校した。五日市の町営キャンプ場を借りて、五年生を対象に一泊二日の行事をするのだが、全職員が参加し、班別に別れてキャンプ場に寝泊りする。炊事も飯盒を使ってやり、材料一切は各班毎に相談し金を出し合って準備してゆくのだから子どもたちの最も喜ぶ行事になり、年毎に盛んになって今も続くのは嬉しいことだ。およそ創設者の楽しみというものは、それをよいことと考えて始めたことが、長く後の人たちに受け継がれてゆくことであると思うが、林間学校もたしかにその一つである。

統計教育の指定校には三十三年の四月になった。

この指定は全都で小中高を合わせて十数校であるが、三ヶ年継続という長期にわたるものであり、しかも三年とも発表会を開くので大変厄介なものであった。

三小がこの指定を受けたのは、校舎はボロでも職員その他の条件が揃っていると見られたからであった。

この三年の職員の努力、児童の学習、町やPTAの協力はまことに筆舌に尽せないものがある

が、学校での発表会には、都内はもちろん他県からの参会も数多く盛会であり、多大の成果を挙げた。

ことに三年目の全国発表は、場所がら区内ということになり、同じ指定校の品川区立平塚小でやったが、これまた参会多数で、本校の先生たちは、日頃の蘊蓄を傾けた発表を数多くやって面目を施したのである。

臨海学校

臨海学校は最初福生一小や二小と同じ鶴原でやる予定だったが、宿舎の割当てがつかず、止むを得ず三小だけが、内海の岩井にある東京学芸大学の寮を借りて開設することになった。

この寮は岩井の志岐にあつて、遠浅の穏かな海はまことに臨海学校向きである。

大学の厚意でこの寮を借りられたことは、三小にとってしあわせであった。

往復は両国で臨海学校行きの列車に乗り換えてするので、煤煙で、顔やえり首など真黒になるが、子供たちはもう夢中になって喜んだものだ。

はじめて見る岩井の海、そこで過ごす三泊四日の生活はどんなに子供たちの夢を育んでくれたことか。

昭和三十一年の臨海学校の宿舎については、前年まで借用していた岩井の東京学芸大学の寮を

予定していたところ、大学の都合で今年から貸せないという。さアそこで困ってしまった、ともかくも、今までの行きがかりからも前校長の広瀬先生にお骨折り願うことになり、一緒に世田ヶ谷の大学本部へ行っているいろいろと折衝をした。

大学としても種々都合もあったことで、なかなか色よい返事が出なくて弱った。しかし最後に、今年限りという条件付きで貸して貰えることになってやっと安心した。

そこで、その年の八月は岩井へ行つて楽しい臨海学校をすることになった。

その翌年からの臨海学校は、高崎の民家で行なうことになった。すなわち今も毎年臨海学校の宿舎になっている富浦町高崎海岸の鈴木民蔵さんの家である。

高崎は岩井駅から館山寄りにあつて前の所とは反対側であるが、当時はまだ民宿が始まったばかりで、海岸はあまり混んでいないので臨海学校の指導には持つてこいの場所である。

そこで八年、毎年夏になると高崎の海へ行くのであるが、この年から臨海学校のやり方を変えることにした。それは一口にいえば、児童中心の教育を文字通り家庭と隔離した形で行なう、ということである。

家庭があり、親があり、教師があつて学区内の学校で行なわれる教育を、この際、親も学校も学区も取り去つて、ただただ児童と教師だけという姿でこの三泊四日を教育しようとしたわけである。

前年までのやり方には、それはそれで長所があるのであるが、ただ何かにつけて担当学年の教師が中心になりすぎて教師全体の参加の仕方に問題があり、父兄の方も大勢ついていて、中には幼児まで同伴ということで、とかくレクリエーション的な気分が生じ、また家庭の延長といった気分が現われ、教育的に考えさせられるものがあるのでこうした改善となつたのである。

改善するについては、多少の問題はあつたが、さいわいにおおかたの支持を得て、その後はずっとこの方式が続いている。

三泊四日も、親もとを離れての子どもの生活という面から考えれば、大事件であるので、先生たちの気の使いようは大変なもので、ただただ事故のないよう神に祈る気持ちで、この日を迎えて送っている。

海岸で迷い子になった子、友だちと喧嘩して他へ飛び出してしまった子、食べ過ぎて夜通し苦しむ子、盲腸炎で夜中に苦しみ出し翌朝一番列車で帰って福生病院へそのまま入院して手術した子、その他いろいろの事故やら事件にぶつかっている。哀歎十年、さいわいに福生三小の校長としてのこの長い生活の中で、取り返しのない大きな事故だけは起していないことを幸いと思っている。

牛浜の駅近く、広大な町のグラウンドと隣接する本校が、いつからか誰いうとなく町の学習院といわれるようになった。

校舎が新しいのに加えて、環境がよく整備されていたためかも知れないが、あるいは内容がそう呼ばれるにふさわしいものを持っていたからかも知れない。

とにかく校舎完成後は、前にも増して内容充実と真剣に取り組めたのは、まことによい職員の揃っていたことであつた。そして歴代のPTA会長を中心としたPTAの熱意ある協力も忘れてはならない。これはまったくお世辞なしでいえることで、私はこの点まことに恵まれた校長と自ら満足し感謝している。

(青梅第一小学校校長)

学校給食の今昔

山 崎 彦 尚

学校給食ほど家庭生活に深いつながりをもっている教育活動はないと思う。学校給食のある日は、家庭では母親がお昼の弁当の支度をする必要もないし、日々の家庭での食生活の中で、この日は食膳に、子どもの分だけ加減ができることになる。もしある日突然に給食を中止するような

事態でも起るものなら、その日の家庭の食事の状況は一変して、被害を受けることにもなる。今日どこの小学校でも、お昼は学校給食が常識となっている。小学生をもつ母親はお昼の食事のことだけは考えなくてよいと言ふことである。

この学校給食は現在、ふた通りの方法に分けられている。一つは完全給食で、もう一つは補食給食である。完全給食と言ふのは、給食のある日は、給食だけでお昼の食事は間に合うもので、これにABCの三つの型がある。A型は週五日給食を行なうもの、B型は週四日給食を行なうものの、C型は週三日給食を行なうものである。補食給食はD型とも言い、子どもに主食を弁当として持参してもらつて、そのおかずだけを作つて添えるのである。現在はこの型はほとんど行なわれてはいないようである。

学校給食は六三制教育とともにじまつた。六三制教育では社会科と言ふ新しい教科が生まれ、クラブ活動や子ども会活動などができたが、学校給食もその一つであつた。ただ学校給食は設備や経費や作業員の都合で、六三制発足と同時に着手できなかったが、教育改革の構想の中にうたいこまれていたものであつた。

昭和二十二年四月、新制度の教育が発足したのである。新制度の教育の内容には、給食があると言ふことから、小規模ではあつたが、その前年頃に施設の準備をした学校もあつた。西多摩地区に学校給食が開始されたのは、その年の九月末であつた。九月から十月にかけて、十七校の小

学校が相ついで開始した。週三回の補食給食、つまりD型週三回実施であった。当時はまだまだ食糧窮乏の時代で、空腹児童や欠食児童が多く、長年の栄養低下から結核児童や皮膚病児童が数多くいた。子どもの体力の回復、栄養の向上は急務であった。学校給食によっていくらかでも栄養補給ができれば、空腹児童も欠食児童も緩和されるであろうとの期待もあった。学校給食に対する国の方針も確立し、必要物資の特別配給作業員の配置も具体化したので、まず十七校が開始にふみ切ったのであった。地方事務所を通じて、甘味料の配給を受けたのを機会に、学校が小豆を調達して、しる粉を作って第一回給食を開始したのは、福生町では九月二十七日であった。それから調味料の特別配給があり、学校が野菜や魚介類を調達して、みそ汁や煮付けものを作り、お昼の弁当のおかずとしたのであった。家庭科担当の先生が調理主任となり、職業安定所から配置を受けた給食作業員がこの仕事を助けた。学校としてははじめての仕事であり、設備もまだ不完全であったので、調理作業は極めて困難であった。給食主任の先生と作業員とは学校の始業前から、野菜洗いや皮むきや味つけや煮込みや食器洗いに忙殺されて、へとへとになる程の給食日であった。PTAの母親が関心を高めて当番を決めて、手伝いをはじめたのは、開始いくばくもない時期であった。

そのうちに、脱脂ミルクが給食用として配給になった。汁と煮付けの学校給食に脱脂ミルクの特別配給は、給食内容を豊かにするものとして歓迎された。米軍が日本の窮乏した食糧事情緩和のために、その軍需品を放出したものが、脱脂ミルクであった。牛乳の中から脂肪をひきぬいて乾燥粉末にした脱脂ミルクは、その量二十三グラムを一合の湯にといた場合、生牛乳よりはるか多量のカルシウムや磷を含んでいる。少年の骨格形成に、皮膚病治療に、すばらしい効果があると宣伝されたが、味の方は生牛乳より劣っていた。子ども達の中には、これを飲むことをきらって、こっそり窓から外へ流してしまうので、窓下は乾いたミルクでまっ白になったと言われたこともあった。二十三年、二十四年と食生活も改善して行ったが、学校給食は、汁と煮付けと脱脂ミルクの補食がつづけられた。

はじめ月五十円の給食費であったが、脱脂ミルクが加わったために値上げを行なった。その半額は配給物資代で、各学校とも調達物資代の不足に苦しんだ。家庭の食事に比較して、学校給食の質は向上できなかった。

昭和二十八年一月から郡内の吉野小学校が完全給食A型の実施に移行した。国から小麦粉と脱脂ミルクの配給を受け、小麦粉をパン製造業者に委託加工してもらって、パンとミルクとおかずによる完全な昼食を作って子どもに食べさせる給食であった。この学校の給食歴は古くて、国民学校の頃、すでに昼食にあたたかいみそ汁を、子ども達に出していた。D型給食を工夫して、週一度だけパン給食を実施していた。家庭にあったパンの配給券一枚に十円を添えてあらかじめ学校に申込みをすると、学校はパン券の数だけ青梅のパン屋にパンの注文をし、十円はその代金

として支払う仕組であった。一日だけの完全給食が行なわれていたのであったが、家庭もこの一日完全給食に協力をしたのであった。都からすすめられて、この仕組を拡張してA型に移ったものであった。ただこの学校の場合は完全給食を実施できる規模の調理場と器具とが、村当局やPTAの卓見によって早くから設備されていた上に、村費による作業員も配置されていた。加えて古い給食歴から、子どもたちの両親の多くは少年時代に、給食のあたった経験があったから、中途半端なD型給食よりも、完全給食により多くの期待をもったためでもあったろう。円滑に完全給食をとり入れたのであった。

これを機会として、十七校の給食は、漸次完全給食に改善され、実施学校も二十八年頃は西多摩地区全域の小学校に普及したのであった。

学校単独で調理していた学校給食は、総合的な施設の完備によって、給食センターまでに発展し、最早、学校教育の中にみごとに定着して行った。今日小学校で給食を実施していない学校は考えられぬまでになった。脱脂ミルクも国産牛乳の増量から生牛乳に変わって行った。

学校給食の発展定着までには、D型開始以来担当の先生と作業員の、文字通り涙ぐましい努力と研究の成果があった。それと呼応することくPTAの積極的な活動がその改善と定着とに拍車をかけたものであった。この意味から言うならば、父母の世論が形成した一つの内容が学校給食であったとも言えるのである。

福生町が完全給食に移行するに当って、第一、第二、第三のPTAが吉野小を見に来られたことがあった。たくさんの母親方が熱心な質問をよせられ、これなら福生でもりっぱになし得るとの自信を固められたようであったが、とり分けて当時の設楽美知一小会長、石川武雄二小会長、船木甚平三小会長の熱心さと意気込みは、吉野小にいた私にとっても、極めて印象深いものがあった。

給食開始の頃、配給調味料だけでは不足のため、自らリュックサックを背負って、格安のみそしょう油をさがし求めに歩いた先輩校長もいたが、今日の現状から見るとまさに一つの思い出話となっていました。また創始の苦心を訴え合った人々も、現職を去ってしまっている。

(元青梅第一小学校校長)

各校PTA会長氏名

() 内は年度

福生第一小学校

横田寿照(二十四) 田村利一(二十五・二十六) 設楽美知(二十七・三十二) 田村祐一(三十三) 上石捨吉(三十四) 竹島益夫(三十五) 田村福一(三十六・三十九) 山崎良之助(四十) 大野達夫(四十)

福生第二小学校

平井初五郎(二十四・二十五) 森田誠重(二十六) 高橋彦市(二十七) 齋藤武雄(二十八・二十九)
石川弥八郎(三十・三十一) 高水茂一(三十二・三十三) 石川武雄(三十四・三十八) 児島春之助(三十九・四十) 森田勉(四十一・四十二) 高水惣八(四十三) 森田清(四十四・四十五)

福生第四小学校

田村祐一(三十四・三十五) 橋本孝藏(三十六・三十七) 麦島力男(三十八・三十九) 古谷富治(四十・四十一) 加藤市藏(四十二・四十三) 田村昌一(四十四・四十五)

福生第五小学校

高水惣八(四十四・四十五)

福生第一中学校

村野和助(二十二・二十四) 秋山誠一(二十五・二十六) 高水茂一(二十七) 村野和助(二十八) 伊

東忠次郎(二十九) 田村利一(三十・三十五) 大久保一郎(三十六) 神宮末松(三十七・三十八) 石川武雄(三十九・四十一) 町田政寿(四十二) 鈴木正作(四十三) 関米吉(四十四) 渡辺一祐(四十五)

福生第二中学校

榊田喜久雄(四十一・四十四) 高崎弥太郎(四十五)

都立多摩高等学校福生分校

土屋禎重(三十・三十三) 細谷作一(三十四・三十六) 高橋彦一(三十七) 島田光一(三十八・三十九) 下田静雄(四十・四十二) 荒井清(四十三・四十四) 柳本達三(四十五)

(第三小学校は座談会の中です)

“子どもの意見”

子どもと横田基地

小六 男子

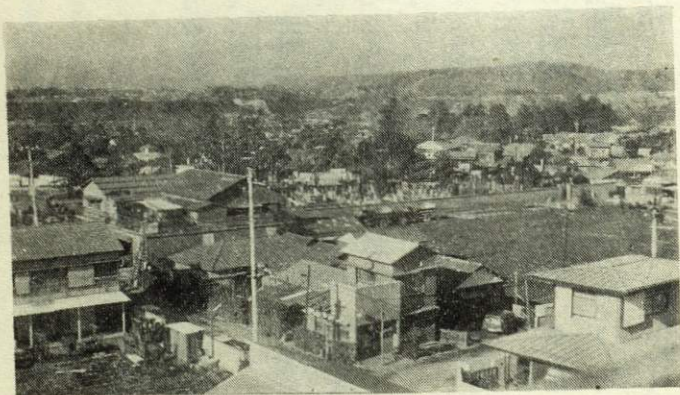
ぼくたちで基地が不安なのは

1、ジェット機の音がすごいことだ。音が大きいのはカッコいいけど、家で勉強などしているとびっくりしてしまう。

2、基地の中にはしばふなどの広いあそび場がある。外人の子どもたちは安全にあそんでいる。でもぼくたちには、そんなしばふなんかの遊び場はない。

なぜ日本の子どもにも、そんな遊び場がないのだろう。

(『ふっさっ子』第一集より)



福生市の中心から多摩川方面を眺める。川をはさんだ向うには草花丘陵、その背後に奥多摩の連山が見える。自然に恵まれたよき“ふるさと”である